血液検査室コメントの追跡調査

検査部　黒山　祥文　川口　貴子
関根　久実　山口　孝一
高崎　将一　大棟久美江
大畑　雅彦

血液検査室では，血液像にて異常所見が認められる場合や臨床医の問い合わせがあった場合にコメント報告をしている．今回，2007年から2009年10月までのコメント報告の件数と内容を調査し，コメントにより新たに検査が出されることによる収益を調べた．

コメント件数は，2007年 218件，2008年 171件，2009年 238件であった．コメントの内容については，破砕赤血球のカウントがもっとも多く，次に血球の形態異常に関する報告や異常細胞のコメント，感染症による好中球の退行性変化のコメントであった．破砕赤血球は，移植後のTMAの早期発見やDIC，TTPなどに認められやすく，臨床医からの問い合わせも多い．また，血球の形態異常や異常細胞の出現は骨髄検査の対象となり，フローサイトメトリー検査や染色体・遺伝子検査にも波及してくる．2007年では骨髄検査が13件，2008年 8件，2009年 8件であり，フローサイトメトリー検査は，2007年 16件，2008年 6件，2009年 7件であった．遺伝子・染色体は，2007年 16件，2008年 15件，2009年 7件であった．その他，好中球の退行性変化では，FDP，D-dimerなどの凝固線溶検査の提出が，2007年 32件，2008年 26件，2009年 28件だった．血液検査室からのコメント報告により，新たに検査されることによる収益は，2007年は約50万円，2008年 約53万円，2009年 30万円であった．

血液検査室より発せられるコメントにより，新たな検査が実施され，診断や治療に大きく貢献され，わずかながらの収益にも貢献していた．

退院支援マニュアルの活用状況
－現状調査より見えた現状と課題－

看護師長プロジェクト　柿宇土敦子　青木　瑞江
小塚　美加　山地　啓子

Ⅰ．はじめに

看護師長プロジェクト「ベッド運営」グループでは，「効率のよいベッド運営を目指す」を目標に活動している．効率の良いベッド運営を行うには，円滑に退院支援を進めることが重要である．そこで，退院支援の現状を把握するために，昨年構築された「退院支援マニュアル」の使用状況と診療報酬加算件数，転院状況を調査した．調査の結果と今後の課題について報告する．

Ⅱ．方　　法

1．現状調査
調査期間：2008年 8 月～2009年 7 月
1）後期高齢者の転院件数と転移先
2）後期高齢者退院調整加算の算定件数

2．後期高齢者転院患者数とケースワーカー介入件数
集計期間：2008年 8 月～2009年 7 月
1）後期高齢者転院件数
2）ケースワーカー介入

3．退院支援マニュアルの活用状況アンケート調査
調査期間：2009年 9 月
調査対象：全病棟

Ⅲ．結果考察

後期高齢者の転院患者数は593件，そのうちケースワーカーが介入した件数は360件であり，後期高

齢者退院支援調整加算が算定されていたのは71件であった．後期高齢者退院調整加算が算定されていないということから，「退院支援計画書」が作成されていない現状が明らかになった．

病棟対象に行ったアンケート調査は，回収率100％であった．退院支援マニュアルの活用状況結果をみてみると「退院支援スクリーニング」の活用は3割，「退院支援計画書を作成しているか」についても3割であり，活用が十分されていないことがわかった．療養支援経過記録の活用は7割であった．

以上の結果より，後期高齢者退院支援加算の算定を阻む要因を各職種や部門および職種間の連携の視点で考えてみた．要因分析では①医事課での退院支援スクリーニングシートの入れ忘れ，病棟への働きかけが弱い②医師・看護師のスクリーニングの未実施，退院支援計画書の未記入③カンファレンスの未開催により，医療ソーシャルワーカーへの依頼の遅れ，介入がないまま退院・転院となる，が言える．また実際に医療ソーシャルワーカーの介入がされていても，退院支援計画書への記載がないために算定できていないケースもあることがわかった．

今後の対策として，①退院支援マニュアルを積極的に活用するために，早期のスクリーニングの実施②スクリーニングシートのチェック漏れ防止としてチェック担当者を具体的にする③記載の徹底④医事課部門より，定期的に算定状況を提示し，関連部門に報告する⑤それぞれの職種がアプローチを行い多職種の連携を強化する，が挙げられる．

これらの対策を基本に，早期に適切な退院支援が行われる事で，効率の良いベッド運営ができると考える．また，職種間の連携のマネージメント役を明確にし退院支援のシステムを積極的に活用することで．後期高齢者退院調整加算の算定にも結びつくと予測される．

乳がん勉強会のこころみ

外科外来　洞口雅代
通院点滴療法室　浅塲香
外科　宮部理香　森俊治

Ⅰ．はじめに

がん診療の進歩はめざましいが，とくに乳がんの分野ではエビデンスに基づく新しい治療が発表され，集学的治療が行われるようになった．治療効果が向上し生存期間も延長する一方で，治療の場は入院から外来へと変化してきている．乳がんに関する情報が氾濫し，患者・家族とも，どのように情報を選択していけばいいのか戸惑っている場面も多く見られる．

また，乳がんの治療にあたっては，患者・家族を中心としたチーム医療が強く求められている．

Ⅱ．目　　的

患者が質の高い医療を安心し，かつ安全に受けられる事を目的に，スタッフの知識のup to dateと情報交換を行うこと．マニュアルやクリティカルパスの作成など日常業務を円滑に進められるように，院内多職種を対象に「乳がん勉強会」を開始した．

「乳がん勉強会」5回終了時点におけるアンケート調査の内容と，情報交換会の内容を後方視的に検討し，勉強会の有用性と今後の展望を考える．

Ⅲ．勉強会の実際

1．内容

毎月第三木曜日に勉強会を行う．

第1回「現在の乳がんの治療について」
第2回「健診・検査について」
第3回「放射線療法・化学療法について」
第4回「手術について（主に乳房再建）」
第5回「ホルモン療法について，情報交換会」

を実施し，各々の回で専門の部署が講師を担当した．その都度，症例カンファレンス，業務調整などを行なった．

今後の予定は「リンパ浮腫について」「再発治療について」「緩和ケアについて」を予定している．

2．メンバー